# ～IS～FINALFANTASY

King of Ctastrophe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～ＩＳ～ＦＩＮＡＬＦＡＮＴＡＳＹ

【Ｎコード】
Ｎ５４７４Ｙ

【作者名】
Ｋｉｎｇ　ｏｆ　Ｃｔａｓｔｒｏｐｈｅ

【あらすじ】
二つの世界、
一つは【ＩＳ学園】インフィニットストラトスを扱う最高科学をもった世界
一つは【帝学院】魔法を使い軍神と呼ばれる神を操る神使いを育てる世界
それは、人々の信仰と秩序。そして歩むべき二つの道
そして、９と９が９を迎え二つの世界が完全に合わさる時、世界に

根源なる意思【フィニス】を与えん。それは螺旋の内を回る【アギト】待つ世界。

人は、生まれる時代も場所も選べないこれは、そんな世界に生まれた「天神　聖」の最初で最後の物語である。

## プロローグ（前書き）

初投稿です
まだ中学生で、更新速度が遅いですが
どうか、読んでください。

どうぞ。

# プロローグ

プロローグ

「なあ更識、俺がここに入っていのか？」
『大丈夫よ』
「なんでそう言い切れるんだよ」
『生徒会長権限があるから』
「それ、もっとマシなのに使えよ」
『いいのいいの、さてついたよ』
「ここは？」
『、ＩＳ学園，ＩＳハンガーよ』
「はぁ！？」
連れてこられたのはＩＳが置かれているハンガーだった
『これに触ってみて』
「え？何で？」
『いいから』
「いいけど何もないと思うぞ？俺は男だし、魔法力も持っているの…に……動いた！？」
ＩＳ…インフィニットストラトス
女性にしか動かせず、帝学院の生徒のように体内に魔法力を持っている人は
ＩＳのコアが拒絶反応を起こし動かすことのできない。
「な、何で？」
『おめでとう』
「おかしい、俺は帝学院、四神，の（朱雀）だぞ？動くはずがない、その前に俺は男だ。」
『そう、あなたは常人の２倍の魔法力を持っていながら帝学院，総帥，に次ぐ，神使い，』

四神…帝学院総帥の直属の四人個人が２つ名を持つ（玄武（ゲンブ）、蒼龍（ソウリュウ）、白虎（ビャッコ）、朱雀（スザク））

四人は別の魔法クリスタルを体内に持っていて専用の‘軍神’を操る能力を持っている

『そして、世界で２番目に男性でＩＳを動かせることのできる人』

「はぁ？」

『さて、織斑先生？』

＞ああ、お前、今すぐＩＳ学園に入れ＜

『ちなみに言うと拒否権はないわよ？』

「えぇぇぇ～」

これから始まるのは１人の神使いの物語である。

## プロローグ（後書き）

前書きにもあるように、更新は遅いかもしれません
どうぞよろしくお願いします。

## 部分設定、主人公紹介（前書き）

１１月２２日
本編との違うところを直しました。

# 部分設定、主人公紹介

設定

ＩＳ…インフィニットストラトス
女性にしか反応せず、帝学院の生徒は体内に
持つ‘魔法力’とＩＳのコアが拒絶反応を起こし
起動しない。

軍神…グンシン
帝学院の生徒のみが召喚でき、体内に持つ魔法力
がある者のみ制御できる。
種類は多彩で、四神ともなれば専用軍神をもてる。

主人公

天神　聖…アマガミ　ヒジリ
身長…１７３ｃｍ
体重…５３ｋｇ
視力
右…不明
左…２．０
右目の色が赤色
左目は黒　メガネを付けている
メガネを外せばＩＳを一撃で破壊できる魔法力を持つ
メガネは、その魔法力を抑えるために付けている。

四神…玄武（ゲンブ）、白虎（ビャッコ）、蒼龍（ソウリュウ）、朱雀（スザク）
のうち朱雀の称号を持つ

専用軍神…アルファディオス

ＦＦ零式のバハムート零式がベース

更識楯無とは面識があり、幼馴染でもある

簪（かんざし）とも仲がいい。

## 第一話　転入初日に喧嘩？（前書き）

早く出来たので、

では早速どうぞ

## 第一話　転入初日に喧嘩？

『皆さーん、席についてくださーい』
ゆっくり口調で言うのは一年四組担任の川口先生である
＜はーい＞
『なんと今日は転校生が来ています、入ってきてくださーい』
ガラガラ
「失礼します」
『はい、転校生の天神君です』
「天神（アマガミ）　聖（ヒジリ）です。皆より一つ年上だけど呼び捨てでも
　構いません。一年間よろしくお願いします」
＜お、男？＞
「はい、そうですが？」
＜＜＜キタ━（゜∀゜）━！＞＞＞
＜二人目の男子！＞
＜しかもうちのクラス！！＞
＜千冬様みたいなクール系の！！！＞
『はいはーい皆さん静かにしてください！
　天神君の席は更識さんの後ろね。』
「更識？」
『そう、そこの青い髪の生徒』
「簪（かんざし）ちゃんか、久しぶりだね」
「うん」
「姉さんとは仲良くなれた？」
「いいえ、仲良くなる気ない」
「そうか、まあいいか、これからよろしく」
「うん」
「（ずっと画面ばっか見ているな）」
『さて、今日のＳＨＲはクラス代表を決めます。自薦他薦構いませ

んよ』
＜はい、天神君を推薦します＞
＜＜＜私も＞＞＞
「はぁ、自分はやってもいい［ちょっとまって］　誰ですか？」
［私は、アフリカの代表候補生（カリア・サーチェスタ）よ］
「そうですか」
「で、なんですか？」
［全く男みたいな薄汚いやつがクラスの代表？
笑わさないでくれる？実力から言えば相応しいのは私か
更識さんのどちらか、そんな弱そうな「誰が弱いのかな」ッ！］
［え、あなたに決まっているでしょう］
「なら、俺と勝負してみる？特別ルールで、
君がＩＳ俺がＩＳ‘以外’で」
［は？あんたバカ？ＩＳに勝てるのはＩＳだけだよ？もしかして頭も
弱っちいんじゃない？］
「べつにＩＳ以外でＩＳに勝つ方法ならあるしね」
［わかった受けて経とうじゃない、その鼻へし折ってやる］
「どっちの鼻が折れるかな？」
『決まりましたね、試合は来週の月曜日、一組と同じ第四アリーナ
で』

休み時間

『どうするの？』
「普通に倒すか、苛めるか？」
『違う、勝てるの？』
「勝てるさ」
『でも彼女の実力は私より上だよ？』
「簪ちゃん」
『なに？』

「先に言っておくよ、
俺は

（朱雀）だ」

## 第一話　転入初日に喧嘩？（後書き）

ちゃんとできてるか心配です
そろそろ、軍神だしますよ。

次回　第二話　クラス代表決定戦
よろしくお願いします。

## 第二話　クラス代表決定戦（前書き）

戦闘模写がうまくできません
でも広い心で見てください。

## 第二話　クラス代表決定戦

『織斑先生』
「川口先生、なんですか？」
『一組が終わったら四組も使ってもいいですか？』
「ええ、構いませんよ」
ビー　試合終了　勝者、セシリア・オルコット
「あれ？今戦っているのって」
『そうです、一組に居る同じ男子の一夏君ですよ』
「そうなんですか、次自分ですよね？川口先生」
『そうですね頑張ってください』
『聖兄さん、』
「簪ちゃん大丈夫、俺はＩＳごときには負けないさ」

「さあ、始めようＩＳと軍神の戦いを」
彼は黒の服の上から赤のマントを付けた制服のような服を付けていた

『あれ？来たんだ、遅いから逃げたと思ったけど』
「そっちこそ逃げないんだな、」
『は？ＩＳがＩＳ以外に勝てないのにＩＳを使わないあなたから逃げるなんてありえないわよ』
「じゃあ、はじめよう　≪我、四神が一人、クリスタルよ呼び掛けに答えよ≫」
『な、何！？』
＜＜＜何あれ、龍？＞＞＞
一瞬の光の後、一本の光の柱から龍のような生き物が現れた
「聖なる光の王　アルファディオス」
それでは、試合開始！
『ッ―そんな化け物なんかに！』

「アルファディオス―メガフレア」
アルファディオスの前に一つの魔方陣が出てきた
そこから一条の光の線が伸びてきた
ドガァン
『キャアアア』
＜＜＜何が起こったの！？＞＞＞
≪ＳＥダメージ２１９　ＳＥ残量３５８　ダメージレベル高≫
『クッ、何？…え？…嘘（ＳＥが２００近く削られた！？）』
「アルファディオス―パラライズパルス」
今度は彼女のうえに魔方陣が出来た
すると、電撃が落ちＩＳが動かなくなった。
『な、何で！？』
「アルファディオス―セイントボム」
『キャアア』
＜＜＜まただ、光っただけで＞＞＞
≪ＳＥダメージ２８５　ＳＥ残量２３　ダメージレベル高≫
≪シールドエネルギー残量危険域到達≫
『何で！―全く攻撃が届かない』
「最後だ、アルファディオス―切り裂け！」
『キャア！―つ、掴まれた！？』
＜＜＜あんな大きいのに早い！？＞＞＞
ビー　試合終了　勝者、天神　聖
『……』
「？―ッアルファディオス助けろ！」
パスッ
「間に合った―川口先生！すぐに保健室へ」
［は、はい］

保健室
＜外傷はありません、気絶してるだけですよ＞

「良かった、なら大丈夫だろう。」
『何で、心配してたの？』
「何でってそりゃ怪我人を心配するのは当たり前だぞ？」
『でも喧嘩を売ってきたんだよ？』
「何を言ってるんだ簪ちゃん？敵でも人の命だよ？」
『……昔から聖兄さんは変わってない』
「そうかな、まあ、あまり変わりすぎても大変だろ」
『そうだね。先に帰ってる。』
「ああ、ＩＳ作り頑張れよ。」
『ありがとう』
パシュウ
「（意外とうるさいドアだな怪我人のこと考えてないな）」
『う～ん』
「気がついたかい？」
『ここは？』
「保健室だよ」
『保健室？』
「そう、戦ってあと気を失ったんだ。で、俺がここまで運んだってわけ」
『ッ―！』
「どうしたの？」
『あなた、何者？』
「ああ、気になるか。皆同じことを聞いてきたよ。さて、改めて自己紹介させてもらうよ俺は、

帝学院の四神が一人、≪朱雀≫だ。」

## 第二話　クラス代表決定戦（後書き）

ちょっと飛びすぎな2話でしたがどうでしたか？
次回も頑張りたいと思います。

## 第三話　鳳　鈴音（前書き）

今回、後半がちょっと笑いが入ってます。

# 第三話　鳳　鈴音

ＩＳ学園…自称天才発明家・篠ノ之束により開発されたＩＳ（インフィニットストラトス）その操縦者を育成する学園である。

校門の手前、
手描きの地図を持った小柄な少女がそこに居た。
『ふうん―ここがＩＳ学園かぁ…』
どうも来るのは初めてらしく、立ち止まったまま辺りを見回していた。
『って無駄に広いわねここ』
と、ボヤきながら地図を睨みつけると、
「あれ？鈴ちゃん？」
『ふぇ？…え～と、どちら様？』
鈴と呼ばれた女の子が首をかしげた。
「……俺だよ、聖だよ。小さい頃あんなに遊んだのに忘れたのか？」
ジっと彼女が聖を睨みつけた
『…聖！？ホントに聖なの！？あの頃はメガネかけてなかったのに…なんでアンタがここにいるのよ』
「何でって…ここの生徒だし」
「ここの？Ｉｓって女しか使えないじゃん」
「特例だよ。二人目のな」
「へぇ、一夏の次の…右目はどうしたの？病気？」
「あ、あぁ、これ？…カラコンだよ、片目だけど」
「…変なの。あのさ、聖、学園の先輩としてお聴きしたいことがあるのですが…」
「んだよ、妙に改まって気持ち悪ィな」
無意識に聖が身構えた。
そんなことはお構いなしに鈴は続ける。

「事務室どこか教えてくれない？」
…しばしの沈黙
「…何だ、それだけかよ、ついでだ俺も用があるし、ついてこいよ」
「なによ、何言われると思ったのよ。怪物じゃあるまいし」
「いや…ガキの頃のトラウマがな…そんで、お前何組だ？」
さらりと、鈴は答えた。

「私？確か４組だよ」

「中国代表候補生・鳳鈴音よ、よろしく」
「じゃあ、鳳さんは天神君の左隣の席ね」
川口先生が勧めた席に鈴が座った
「まさか聖と同じクラスだとはね…誰かの陰謀かしら」
「俺が聴きてぇわ…」
「そこ！静かに」
珍しく先生が怒鳴った。
「「はーい」」
「もうすぐクラスリーグマッチがあるのは知っていますね？クラス代表は天神君だけど、訳あって彼はＩＳ使えないので、副代表を決めたいと思います。希望者はいますか？」
その問いに代表候補性生同士のカリアと鈴が手を挙げた。
当たり前と言えば、当たり前である。
「他にいませんか？推薦でもかまいませんよ」
カリアが立ち上がって、
「副代表は私で十分です。やるだけ時間の無駄でしょう」
「何言ってんのよ、アンタそんな気持ちで副代表なれると思ってん

の？」
鈴も立ち上がってカリアと対峙した。
「いきなり転校してきてなんなの？まさか特別扱いきどり？」
「まさか。自信があるから立候補したに決まってるじゃないの」
「おい、鈴、やめろって」
「なによ聖、アンタはどっちの味方なのよ」
「いや…そういうわけじゃねーよ。ここで愚痴っても話にならねぇだろ」
「向こうの味方するってわけ！？幼馴染なのに裏切るってワケ！？」
「お前幼馴染をなんだと思ってんっだよ！」
「え？奴隷？」
「驚くほど見下された！？」
「あ、間違えた。メガネがのくせに右目カラコンしてる奴が私の奴隷だったんだ」
「俺じゃねェかよ！よく個人名出さないで表現したな！！」
「ホント？私小説家になれるかも」
「そんなこと言ってねぇぇぇぇぇ！！」
そんなやり取りを続ける二人。
完全に蚊帳の外に追い出されたモブキャラのカリアがブチギレた。
「誰がモブキャラよ！！」
だってもう出ｎａ…
失礼、口が滑りました。カリアがキレた。
「なんなのよもう…あぁ、もうそこ！！何勝手に進めてんのよ！話に混ぜなさいよ！」
「あ、すまんカリア。ついクセで。鈴、カリア。俺の意見はこうだ。ここでいがみ合っても仕方ないから直接戦って決めたらいいでしょ」
あんまり素っ気無い提案に慌てて川口先生が割って入る。
「ちょっと天神君！？勝手に決めないでくださいよ！！」
「なぜです？」
「どこで戦うつもりですか！」

「もちろん、アリーナですが？」
「使用許可出すの先生なんですよ！？代表決定戦もこの前やったばかりですよ！」
「じゃあ先生、アリーナ使用許可申請出せばいいんですよね？」
「そうですけど…あの…天神君？まさか…」
「よし…おーい！！楯無先輩！！」
窓に向かって聖が叫んだ。
そして、上からロープが垂れてきて、
「聖、呼んだ？」
＜＜＜＜楯無先輩！！！＞＞＞＞
クラス全員の女子（鈴、カリアを除く）が一斉に楯無に駆け寄る。
≪どうやって来たんですか～≫
≪お怪我はないですか？≫
≪ってか好きです！！付き合ってください！！≫
「…いつもあんな感じなのか？カリア？」
多少、というかかなりドン引きして聖が言った。
「…わたしに言わないでよ」
返す言葉もないようだ…モブキャラだから意味深なセリフ言わないと消えちゃうよ？
「ナレーターいい加減にしなさいよ！！なんなのよこの地の文！ホントに原稿に書いてあるわけ！？」
ええ、まあ、あなたモブキャｒａ…いえ、いじられキャラですから。
「作者ァァァァァ！！！」
「…何してんだ？カリア。そんな叫んで」
「なんでもないわ！」
「おおぅ、なんかゴメン…」
「ねえ…聖？用があるなら早くしてくれない？いい加減ロープに捕まるの辛いんだけど」
「あ…すいません楯無先輩、アリーナ使用許可証持ってます？」
「あるよ～、ほら」

「サンキュっす。それでは」
「ん、またね～」
<<<<先輩～行かないで下さい～>>>>
女生徒の願い虚しく楯無はロープを登って去っていった。
「さて、先生、これで大丈夫ですよね？」
「はぁ…わかりました。…では、明日の放課後、第3アリーナで試合を始めます。二人共、しっかり準備してくださいね」
ため息混じりで、ようやく川口先生が折れた。
「フフフ…ぜっっっったいに負けないわ…作者も…ナレーターも…」
おや？モブキャラが何か言っているようですが…
「もう名前ですら読んでくれないのね！いいわ！やってやるわよ！！」
「あの…カリアさん？大丈夫ですか？」
「大丈夫です…わたし、至って正常ですから」

## 第三話　鳳　鈴音（後書き）

はたして、モブキャラは生き残れるのか！？

「もう、モブキャラなんて言わせない」

次回も戦闘だぁ！

はぁ、戦闘摸写どうしよう

## 第四話　お互いの意志（前書き）

今回は戦闘回です。

それと、前話から薄々気付いている方もいるでしょうが
作者が二人なのです、最初は美術部の九州大会に出場する為
絵を描いていて、この小説を書けなかったため、前々話までは
短く、飛びすぎな話が前話から良くなっています。

## 第四話　お互いの意志

…誰よ……私をモブキャラって決めつけたの…

原作に出れないからここでブレイクしようとしたのに…

こうなったら乗っ取ってやるわよ！！

フフフ…こうやって地の文も私が占拠したわ！！

暗黒面（ダークサイド）に落ちようが構わないわ…

「オリキャラ出したけど、パンチが無いから無かったことにします」

って、理由だけでデリートキー押されてたまりますか！

オリキャラ作ったくらいなら絵師でも探して描いてもらうとかしなさいよ！甲斐性なし！

……どのみち、勝たなければいけない。私は。

――――自分が消えないために。

今日の授業が終わり、私は足早に自分の寮に帰った。
アリーナに向かうついでに、教材を置きたっかたのよ。
そのまま、椅子に座ってこれからのことを考える。

この後、クラスリーグマッチの代表が決まる。恐らく、その結果で私の運命が決まる。

いきなり天の声が聞こえたと思ったら「モブキャラ」って言われたのよ！？

しかも、「消えちゃうよ？」とか言われて…

リストラ宣告を食らったサラリーマンの気持ちがわかる気がするわ…

だけど、そのまま諦めるほど私は出来た人間じゃないわ。

…こうやって地の文使えるのも、最終警告なのかもしれないわね。

「本当に、勝てば…私は消えないのね？」
――――――おや？もう地の文はいいんですか？…ええ、勝てば。
の話ですが。
「…どうしてこんな運命になったのかしらね。悪いことした覚えはないのに」
仕方ないですね。私がどうこう言える立場ではありませんし、上に従う身ですから。
「あんた、サラリと言っちゃいけないこと言った気がするけど」

どうせ言っても、今から消えるモブキャラにしか聞こえませんって。
「あんたずっと毒舌ね！！」
そういうと、彼女は立ち上がって自分の部屋出た。そして第３アリーナへ向かう。
「何勝手に私の行動進めてんのよ！…分かったわよ！出るわよ！」
なされるがまま、私は第三アリーナへ向かった。
途中、イカみたいなコスプレをした女の子が地球を侵略するのを止めたり、ひと繋ぎの財宝を手に入れたりしたけど、地味過ぎるから言うのは止めておくわ。

アリーナ内の整備室。鈴の専用ＩＳ‘甲龍’の最終調整が本人の手で、行われていた。
そこに、聖も立ち会っていた。
「鈴。お前って強いのか？」
「国の代表候補になれるくらいにはね。我が下僕クン」
「下僕ゆーな。…んで、何やってんだ？」
「バススロットにイコライザーをインストールしてんの」
「はぁ？も少し機械オンチにもわかりやすく頼む」
「んーと、新しい機能を追加してるってとこかな」
口では会話しながらも、コードを接続したり、接触不良が無いか検査したりと、忙しそうである。
「…よしっと。聖、お願い」
「あいよ」
鈴からカバンを受け取った。
「試合が終わったら、西口ゲートで待っといてね」

「あまり待たすなよ？」
手を振りながら鈴に別れを告げ、
聖はそのまま整備室を出て観客席へと伸びる廊下を歩いていく。

――――――――――――――――≫≫
その先、長い黒髪を後ろで束ね、右目が青い長身の女性が、壁に寄りかかっていた。
聖を待っていたらしく、聖を見つけるとこちらに歩いてきた。
彼女も、聖がクラス代表のときに付けていた黒の服にマントを羽織っている。
ただ、マントには蒼い龍が描かれていて、色も蒼い。
「『蒼龍』目立つことはするなって総帥に言われたろうが」
「大丈夫よ。キミに伝言したらすぐ帰るから」
「お前は、出歩くだけでもしっかり目立つんだよ…。…で、総帥か何かからの連絡か？」
「いや、私からよ。これを渡すだけ、誰にも見せたらだめよ？わかった？」
紙の中身にはこう書かれていた

『〝朱(あか)の戦人(いくさびと)〟の在る地、〝赤(あか)の剣(つるぎ)〟砕かれかねん』

「ああ、わかった。」
「そう、それじゃ」
マントからセピア色の紙を取り出し、それに吸い込まれて消えていった。
≪≪――――――――――――――――
観客席に着いて、席に座る頃には、鈴、モブキャラも出撃ハンガー

に立っていた。
「…もう勝手にしなさいよ。何と言われようとも、私は勝つわ」
おっと、、、モブキャラが一層暗黒面側に落ちたようですね。
「あれ？聖兄さん。遅かったね」
隣に座る簪がキープしていた席を譲った。
「トイレ探しても女子トイレしか無いだろ、だから外の来賓用公衆トイレまで行ってきた。試合は今からか？」
「うん、川口先生の合図で始まるはずだよ」
向かいの巨大電光掲示板の下のスピーカーから、川口先生の声が聞こえた。
【それでは、試合開始します。４組　鳳鈴音　同じく　カリア・サーチェスタ　規定の位置まで移動してください】
反応した両者は、自らのＩＳを展開し、ピットから飛び出す。
鈴の機体は
「‘赤’を基調とした黒のラインが入っていて、両肩に球体の何かが浮いている」
【５・４・３・２・１…】
【試合開始！！】

一斉に起動し、剣を交える。
‘甲龍’は、付属の丸い機体から放つ《衝撃砲》がサブウェポン。
メインウェポンとして、《双天月牙》…青龍刀を二丁扱う。これは、柄を繋げて一つにできる。
対する‘――――’は、――――を武器の開発を得意とする――――社の――――であり――――

「もうＩＳの説明すらさせてくれないわけね…いいわよ。こんな世界ごと…壊してるわ！！！」
「なーに戦闘中に大声で独り言してんのよッ！」
左手の青龍刀モブの質素な剣をかち上げ
空いたスペースに右手の青龍刀が叩き込まれた
「まだよッ！」
勢いはそのまま、今度は両の青龍刀を突き出した
「うう…くそっ」
かろうじてモブは後ろにのけぞる
「もう短縮されすぎてワケ分からなくなっているわよ！？」
鬼の形相で睨まれた、女ってコワい…真面目にやろう。
「カリア！どうしたのよ！昨日からずっと大声でうわ言ばっかで、頭でもイカれたの！？」
「…ハッ！アンタも…。アンタもそうなんでしょ！？私を…私を消したいんでしょ！？ここから、この世界から！どうせ、どうせ…みんな、みんなみんなみんな！！！！跡型もなく私を消すんでしょ！？」
「落ち着きなさいよカリア！消すってのが何なのか分からないけど私はあなたに負けない！クラスリーグマッチに出る為に今戦っているの！」
「やっぱり…やっぱり…。――――負けられない、負けられない！！勝って私は、私は残るんだ！！」
それまで飾り気のなかった質素な剣先が、二つに分かれ刺又のようになった。
両者は交差しながら斬り付け合い、空中へとせり上がっていく

「なあ、簪。なんか言い合ってるように見えるけど」
はるか下、戦況を見つめながら聖がそう言った。

「そうだね。…心理戦でもしてお互い探り合っているのかも二人とも、相当福代表になりたいんだね…」
「クラスリーグマッチってそんなに価値あるのかよ」
「…まあ、スカウトも来るし、滅多に無い行事だからじゃない？」
「カリアはしらねぇが、鈴が心理戦なんて細かいことできたかねぇ…」
鼻を鳴らしてつぶやいた。
「鈴ちゃんの事心配？」
「――――――――いや、ちっとも」
頭上で甲龍の衝撃砲が撃たれた

空気が波打つ音がした。

カリアは衝撃砲の下をくぐり、反動でバランスを崩した鈴に急接近。
振り下ろされた刺又を左の青龍刀で受け、迎撃すべく右手を下から振りぬこうと――――
する前にカリアの刺又の剣先から、小さく、黒光りした何かが複数出された。
『ッ！小型の…爆弾！？』
そう思い動きが一瞬止まった。
その隙にカリアが離れる。
「やっば…――――」
連鎖する爆発に彼女は巻き込まれた。
「鈴！！」
「鈴ちゃん！」
観客席から二人の声が響いた。彼女の耳には届かなかった
粉塵の中から、甲龍が自由落下していく。
「アハハハッ！鳳鈴音！私の勝ちよ！」

追加攻撃を狙い、カリアも落下する。
「…う…くぅ…ッ」
推進装置≪スラスター≫を逆噴射させ、姿勢を無理やり直しながら衝撃砲の照準を合わせ、放った。
「！！」
対してカリアは刺又から小型爆弾を発射する。
フィールドのセンターサークルで今度は二人が爆発に巻き込まれた地表を削り砂埃が舞い上がる。

「二人ともすごいわね…」
指令室で一人、川口先生が感嘆の声をもらしていた。
「川口先生」
「あれ、織斑先生じゃないですか、どうしてこんなところへ？」
「すこしな、なに、他のクラスの代表の情報を集めて一夏を有利にしよう等とは思っていないさ」
現れたのは、『織斑千冬』男にしてＩＳを動かせる織斑一夏の実の姉であり、
第一回モンド・グロッソ総合部門優勝者の「ブリュンヒルデ」と呼ばれている『世界最強』である。
しかし、その最強がこんなブラコンだった「ギン！！！！」ゲフンゲフン…失礼。
無造作に髪を下ろし、一見ガサツそうに見えるところを差し引いてもかなりの美人である。
「二人のシールドエネルギー残量は？」
「３０もありません、すごい接戦ですよ」
織斑千冬は、鋭い眼差しでモニターから目を離さない
「次で決着か…どちらが勝つか。」

視界もある程度回復し、相手を目視できるようになった。
「…暗黒面≪ダークサイド≫が何だっていうのよ…高々堕ちていくだけで消えないなら喜んで堕ちていくわ…！だけど
それすらもできない。だから道連れにしてあげるの…、鈴！！あなたも――――」
「カリア、カリアはすごいよ」
「――――…ッ！」
不意に豆鉄砲を食らったような感覚に飲まれ、うまく話すことが出来ない。
しかし、鈴は構わず続ける。
「この試合でさ…ずっとカリアは私をすごい気迫で見ていた、そりゃあもうすごいよ、今だって
そうだもん。…諦めてない眼をしていたよ、消えるだかなんだか言ってヤケクソに聞こえたけど
全然諦めてないよ、懸けているレベルが私とどこかが数段違う、――――だからさ、
これじゃあ失礼だよね」
一度目を閉じて――――開いた。
「負けない、カリア以上に負けたくない気持ちをぶつける」
青龍刀の柄を繋げた。
一方は、刺又をかたく、握り直した。
二人はもう、何も言わない。
相まって、聖ら含む観客も静観している。
最大出力で、推進装置≪スラスター≫が稼働した。
「ハアアアアアアアッ！！！」
「らぁぁぁぁぁぁぁぁッッ！！！」

咆哮。そして激突。そして甲高い金属音の交錯
そして試合終了のブザーがなった。

日は半分ほど沈んでいた、夕方の日光が当たる西口ゲートには
まだ明るかった。
「あいつ、春でも西日はキツいってわかっていて待たせてんのか…？」
顎から汗が垂れていく
「鈴ちゃんも試合終わって疲れてるんだよ。シャワーでも浴びているはず」
結果は鈴が勝った
「あ、来たよ」
スポーツドリンクを片手に彼女はやってきた
「よう勝利者、お疲れ」
「ん、ありがと」
カバンを受け取り飲み物を中のいしまいこむ。
「鈴ちゃん最後のは危なかったね」
激突の際、彼女の片方の青龍刀の部分が強引にはがされた。
左から右に剣を振っていたカリアは、刀身を無理に逆にして、斬りつけてきた
「…そうね、あのままカリアに押し負けてしまうとこだった」
刀身を無理に逆にした為カリアの握りが甘く両手で握っていた青龍刀に
弾かれて、決着。
「カリアの事見習わなかったらあんなことしてないわ」
「見習う？」
「そ、あいつ試合中ずっと独り言ばっか言っていたのよ聞いただけ

じゃ
ヤケクソに私と戦ってるみたいだった。でも最初に爆弾で飛ばされた時も
鍔迫り合いしていた時も、最初から最後までなんか、こう…覚悟を持った眼をしていた
それくらい、クラスリーグマッチに懸けるものが大きかったんだと思う。私はカリアの
そんな所を見習ってカリアを倒した。」
『試合終了後カリアはその場に座り込んでいた、なにかを失ったような虚ろな目をしていた
カリアにあなたのためにも、私のためにもクラスリーグマッチで私は優勝すると彼女に言った。』

日は沈む、垂れた汗が熱を奪って肌寒くなった。

『朱の戦人在る地、赤の剣砕かれかねん』

彼の頭のなかにある言葉が浮かんだ
『たしか…鈴のい甲龍も赤い…鈴の試合の前蒼龍からの警告文…』
自分の前を簪と夕食について楽しそうに話している。
『朱の戦人と赤の剣……なにか…「聖ー！」』
「なんだ？」
「早くしないと置いていくよー」
「学食が終わっていたら聖兄さんのせい」
いつの間にか遠く離されていたようだ
「ああ、『ひとまず様子見だけだ、今は考えても仕方ない』今行くよ」
小走りで彼女らに駆け寄る

もう日はほとんど無い

外灯の光だけの寮への道

夜が更けゆく

## 第四話　お互いの意志（後書き）

これから、受験対策で、更新速度が落ちるかもしれません。

感想などお待ちしております。

## 閑話　魔法使いの日常（前書き）

はじめまして、Ａｂ．５９（えびてんごく）といいます。
原案者に誘われて、第三話以降を執筆しております。
ただ、自分ＰＣが無く、原稿が手書きなんですね、
まあ、投稿するのは原案者のキングなので、いいんですが。

ここで、読者の皆さんにお願いがあります。
本作のオリキャラをイラスト化して下さる優しい絵師さんが
いましたら。感想などに連絡手段を書いてくださるとうれしいです。
では、閑話　魔法使いの日常　どうぞ。

## 閑話　魔法使いの日常

俺は寮の部屋が決まるまでは、当分の間自宅通学になっている。
そもそもＩＳ学園に転入するのが急だったため寮の部屋が空いていないのである
その為、帝学院がかつて教員用として所有していたアパートに住んでいる。
ここから、ＩＳ学園まではおよそ３０分決して通学に良い場所では無い。
……いや、むしろ結構悪いに入るだろう。
正直、転送魔法を使えば一発なのだが、いかんせん光や音やらでなにかと目立つ。
このアパートはもう帝学院とは関係無い人が所有しているから、魔法を使えば即
隣人トラブル物だ。
‘朱雀’の継承時、右目は朱く染まった。
そのせいか、近隣の方々には、アニメに影響されたイタい人だと思われている。
弁解したいのは山々なんだが、帝学院の生徒の事は関係者以外は知られてはいけない決まり
がある。なので、弁解はおろか、説明すらもできない。
そのため、周りのひとは「どうせカラコンでしょ」と、薄い目で見られているのである。
ならばと左目にカラコンを入れて左右同じにしようと考えた。でも無理だった。

…コンタクトを目に入れるのこえーよ。

あんな物入れるヤツの気が知れなかった。マジでムリです。

どうせもう少ししたら寮生活だし。と、イタい人扱いについては半ば考えていない。

登校の場合

買い置きしてある惣菜数品と白飯（しろめし）と麦茶で朝食を済ませ、俺は家を出た。
金はどこからでてるのかというと、半分が帝学院からの支給、残りは親からの仕送りである。
光熱費など諸々の生活費を切り詰めたら結構な額が残ると思ってもらっていい。
郵便受けに何も無いことを確認し、駐車場を横切って歩道に出た。
四月の中旬とはいえ、まだ夏服一枚で迎える朝はまだ寒かった。
いつもより足を早めて体を動かす事で寒さを紛らわす。
ＩＳ学園へ向かうには、まず１５分ほど歩き、そこからモノレールでむかう。
今日は１０分程で駅に着いた。
待つ間、ノートに微弱の火の魔法陣を浮かびださせ、それを破き八つ折りにして目を閉じた。
すると、熱を発した、急ごしらえのカイロの完成である。
――――――不意にポケット内のケータイが振動する。
ＩＳ学園の一夏と同じ男生徒なら、専用ＩＳ持ってるだろって？
今は、とある事情で、ＩＳの使用が止められている。よって、付属機能すら使えない。

【Ｆｒｏｍ：更識　簪】

【Ｓｕｂｊｅｃｔ：朝早くゴメン】

【聖兄さん、明日ヒマ？聖兄さんの家に久々に遊びに行きたいんだけど】

『……』

無言でキーを叩く。

【別に構わないけど教室で話せばいいのに】

――――スグに返ってきた、女子ってどんな指の使い方したらこんな早くなるんだ？

【ほんとは実家に帰るつもりだったけど、あの人も帰ることになってるってお母さんが言ってたから、やめにした。それでヒマになったから遊びに行っていいかなって、教室で、こんな話をしたらみんなに確実に何か言われるから、しかもイタズラで尾行されても嫌だから。】

たしかに、あの二人の仲は悪いどころじゃないもんな、楯無先輩なら、どこからか、この情報を手にいれて、尾行したりなんてかんたんにやりそうだ

【なるほどな…じゃあ、明日の１１時位に来てくれれば居るよ。また後でな】

分かったと返事が来る時にはモノレールがホームに着いていた。そのまま乗り込んだ。

下校の場合

特筆すべき事は何もなく今日の授業が終わった。
あの強情な鈴が誰かにデレてるとか聞いたけどあんな女子校環境に
そんな出会い
があるとは思えない。
朝乗ったモノレールと同じモノレールから降りて、いつもご贔屓に
しているスーパーに
足を向かわせた。惣菜もそろそろ尽きるし、簪ちゃんも明日来るし
多めに買っておくか。
ここの惣菜のレパートリーは半端なく多い、おかげ様で、毎朝飽き
ずに食べ続けていられる
パッケージの賞味期限を見ながら短めの物と長めの物、バランス良
く選んでいるとき、着信音が鳴った。
ＩＳ学園からだった、
『俺…何かやったかなぁ？』
と思いながら電話に出た。
「…もしもし？」
『あ、もしもし？天神君ですか？』
この口調と声は川口先生だ
「川口先生？どうしました？」
『寮の部屋が決まりましたので、次の月曜日までにある程度の荷造
りお願い出来ますか？』
「マジで？寮に行けるんですね！？わかりました。やっておきます」
『お願いしますね』
と電話が切れた。
…さて、ダンボールどこに置いてあったっけ。

買い物かご片手に、一番空いているレジに並んだ。
周りはタイムセールと言う戦争を勝ち抜いた猛者が目の前に居る。
よほどレジ係りの手際がいいのか、思いの外速く消化されていく。
「次のお客様どうぞ～」

レジ横の菓子に気を取られてた俺は、我に返って買い物カゴをレジ台の上にのせた。
――――――…聞き覚えのある声がしたけど気のせいだろう。財布を取り出そうとして、カバンを開けたとき、
「……聖兄さん！？」
あれ？簪の声がしたぞ。
顔を上げたら、レジ係りの制服を着た簪がいた。
「更識ちゃーん、そのお客さん終わったら上がっていいわよ～」
「あ、はい」
ベテランの雰囲気丸出しのパートのおばちゃんが出てきた。
「聖兄さん、この後時間ある？」
「うぇ！？あ、あぁ…」
間の抜けた声が俺の喉から鳴った
「じゃあさ、ここを出て近くに公園があるから、そこでまっていて」
俺が持参したマイバックに商品を詰め、精算を済ませて簪はＳＴＡＦＦ　ＯＮＬＹと書かれた扉の奥に消えた。
え？ナニコレ。どういう展開？
…とりあえず、公園だ。そこで考えよう。

手頃なベンチに座ってカバンとマイバックを隣に置き、体を反らして背伸びをした。
ついでに欠伸（あくび）も出た。
やべ、ねむい。瞼が重くなったけど、俺を呼ぶ声がしたのでなんとか踏みとどまる。
簪は所々にピンクやオレンジの水玉が入った裾の長いワンピースを着ていた。
「お前、何でこんな所でバイトしていたんだ？」
目をこすりながら言った。簪は俺の隣に座って
「聖兄さんこそ何してたの？」

「俺が買い物以外でスーパーに来るように見えるか？」
「それもそうだね」
そう言って苦笑した
「で、何でバイトを？」
「えっと…急にお金が必要になっちゃったから」
「なんだ？悪いコトでもしたか？」
「そんなんじゃないよ！ただ…」
「ただ？」
「――……」
頭を俯けた。言いたくないなら言わなくていいのにって言おうとして
「…私さ、ＩＳを造るの。一人で」
簪が告白した。
「造る？ＩＳ（あんなもの）独りで作れるようなものじゃないだろ」
「一からではないけど、材料とかは自分で集めたいからこうしてバイトしてるの」
「そんな気の遠くなることやってて辛くないか？」
「全然辛くないよ。だって自分の手で、自分のＩＳが作れるんだよ」
「そうか、でも無茶だけはするなよ」
「うん。心配してくれてアリガト」
「いや、心配くらいするだろ？幼馴染なんだからさ」

――♪～♪６時になりました。児童、生徒はお家に帰って、お勉強やお手伝いをしましょう♪～♪――

６時を告げる音楽が流れ始めた。
「もう６時だ…そろそろ帰るか、」
「うん、私は次のバイトに行くから」
「おう、気をつけろよ最近何かと物騒だから」
「お母さんみたいなこと言わないでよ」
くすりと、小さく微笑んだ。

そんな顔もできるじゃないか、
姉さんにも見せればいいのに。

簪が去った後、俺も立ち上がって帰ることにした。だけど、向かった先は公衆トイレ
個室のドアを閉め、鍵は掛けずに俺は制服のポケットから、セピア色の紙を取り出した。
蒼龍が使った、携帯型魔方陣の一つだ。
なんだかんだで一番効率の良いし、使いやすい。
どうせ荷造りするなら今日からやったほうがいいだろう。
念の為に魔法を使ってる所を見られないように、トイレにはいったんだ。
行き先をの位置を念じ、俺とカバンとマイバックは吸い込まれるように紙の中に入っていった。

無事俺は自宅へと帰宅した。
…やれやれ、吸われて消えるって、ほかの人から見ると怖いことなんだろうな。
買ったものを冷蔵庫に入れ、カバンを勉強机に引っ掛けた。
学園で夕食は済ましてきたから、今日はやれるところまでやろう。
家具は据え置きされてるのが殆どだし、そんなに時間は掛からないだろう。
作業を始めようとお気に入りの本に手をかけた時、不意にケータイが鳴った。
今度は未登録からだ。
「もしもし」
『あの、天神君？もしかしてもう荷造り始めちゃってますか？』
「川口先生…一体どこから電話してるんですか？荷造りなら、今してますけど…」

『今、家なんです…じゃなくて！部屋の話なんですけど…』
「どうかしましたか？」
『えっとですね…あの後確認したら、その部屋が用具倉庫として使っていたらしくて、
環境整備が終わるまで、使えないそうなんです。』
「――――用具倉庫？ヨーグソーコですと？」
『すみません天神君もうしばらく自宅通学を続けてください…』
その言葉を聞かされて、本を落とし、左手はダランと下に伸びきってしまっていた。

…あ～あ、携帯型転送魔方陣は少ないんだよなぁ～

また蒼龍に頼むか。

今、別に自分で転送魔法使えよ！、って思ったヤツ
魔方陣を呼び出すのに魔法力つかいたくねぇんだよ
魔方陣をペンで書けるの蒼龍しか居ないんだぞ？

ペンで書かれた魔方陣はその魔法を使うのに自身に魔法力を使わなくて済む。
その代わり、線の長さや、書く順番、太さ、ｅｔｃ…を間違えると、全く別の魔法になったり、
中途半端に発動したり、使えなくなったりで、とても繊細な作業をしないといけない。
その為、完璧に書くことのできる人は世界でも片手の指に入る位しかいない。
その点、魔法力を使えば、完全な魔方陣を呼び出せるので、便利ではある。
しかし、そこに質量保存の法則など、自然の法則や物理などが入っ

てくると、多量の魔法力を必要とするのだ。

「しかたない、また蒼龍に頼むか。」
そう言ってまたケータイを開く

【ｔｏ：蒼龍】

【ｓｕｂｊｅｃｔ：頼みがある】

【こんど、帝学院に顔を出すから、そのときに、
携帯型転送魔法陣の紙を何枚か作ってくれ。】

「送信っと…これでいいだろ、今日はもう寝よう。…そうだった、
明日は簪が来るひだったな。」
そう言い、帝学院に売られている暦にメモ書きをして再度ふとんの
中に入る。

## 閑話　魔法使いの日常（後書き）

はい、今回も作者の親友のＡｂ．５９が原稿を仕上げました。
今、右目が見えなくなっていて、更新が遅くなりました。
これからは、前書きをＡｂ．５９が書き、あとがきを作者が
書きます。
これからも、二人で書いていきます。
応援よろしくお願いします。

それと、前書きにもあるように、オリキャラをイラスト化して下さる
絵師さん、お待ちしてます。

何か読んでいて解らないことや、意味が解らない単語等が有りまし
たら、
教えますので感想に書き込んでください。

## 第五話　赤く、朱く（前書き）

祝！！
１００００アクセス
キタ―（゜∀゜）―！
はじめまして、もしくは
こんにちは、Ａｂ．５９です。
ここで、簡単に自己紹介を、
沖縄県出身、中学三年生です。
まさかこんなにも早く一万アクセス突破とは、
読んで下さっている皆さん。ありがとうございます。

では、ちょいシリアスな話をどうぞ。

# 第五話　赤く、朱く

「蒼龍が直にメッセージねぇ…。どういう風の吹き回しかしら？」
「俺に聞かないで下さいよ…。」
「これさ、いつ伝えられたの？私でさえココに入り込んだの判らなかったし…どれだけ手間かけたんだろ」
「三日前ですね、クラスリーグマッチの代表を決める前です。」
もう一度、楯無先輩は聖に渡された伝言を読み返した
「…まあ、あなたに来たってことは、赤い剣は鈴ちゃんだろうね。わざわざ学園まで潜ってまで帝学院の伝言は変だしね」
「…やっぱり、鈴ちゃんですか。帝学院側の話なら直接呼び出せばいいですしね」
「となると、‘密命’かしらね。」
「それは無いと思います。あいつは‘自分からの伝言’と言っていたので、不確かなモノなんでしょう。現時点でＩＳ学園で自由に行動出来るのは俺だけですし、かと言って総帥に伝えるほど確実じゃない、それに急に帝学院の人たち来てもこっちでゴタゴタが起きてしまうと行動が制限されてしまう可能性の方が高いですしね」
「ふーむ、それもそうだね、どっかに情報が漏れるのを気にしているからこんな抽象的に書いたんだろうね。――――赤い機体をもっていて、聖の知り合いは鈴ちゃんしか居ないし…聖がいる場所だからＩＳ学園内で鈴ちゃん絡みなのは確定だね」
「そうっすか…でも――――」
「果たして鈴ちゃんが‘加害者’なのか‘被害者’なのか」
気にかけていることをさらりと言われ、返す言葉が出なかった。

「赤の剣‘で’ＩＳ学園‘が’砕かれるのか
赤の剣‘が’ＩＳ学園‘で’砕かれるのか」

「いやー日本語って難しいねー」
「…笑えないですよ」
「まあ、次にＩＳを表立って使うのは学級対抗戦（クラスリーグマッチ）の時だけだから今は様子見だけね。」
「…わかりました。」

「動かし方は、自分の体で動かそうとしないで脳内でイメージしたほうが動きやすいよ」
鈴が訓練機に試乗しているクラスメートにコツを教えていた。
専用機持ちである鈴とカリアの二班に分かれ、実技訓練をしている。
「…ケッ、いい御身分なこった」
遠目で眺めつつ聖がグチった
未だ許可が下りていない為、ボーッとするのはなんなので
の一言で川口先生と備品搬入作業をさせられていた。
「そんなこと言わないで下さいよ。…後でランチ奢りますから」
「特Ａランチ頼みますよ」
「はいはい」
苦笑いをして彼女は荷物を持ち直して前を向いた。
クラスリーグマッチが近く、それに備えての消耗品の補充と聖は聞かされていた。
手の空いている職員や生徒を使え。とのこと――――絶対、楯無先輩が言ったことだよな…
そんなことを思いつつ川口先生に先生に話しかけた。
「先生、クラスリーグマッチってどんなスカウトとか来るんですか？」
「いろんな人が来ますよ～。全部は言えないですけど、例えば宇宙関連の方とか」
「宇宙？ＩＳとどんな関係があるんですか？」

「まあ、ＩＳは元々宇宙での多目的活動を目的にした、いわば次世代の宇宙服みたいなモノですので」
――――本当にそれが目的か？
聖は疑問を覚えた。ＩＳの機能そのものはどう考えても軍事又は戦闘用としか見えないからだ。
「でも、そういう凄いスカウトさんが何人も来るから私たち職員は、試合のオペレーター以外は全員警備やんないといけないからユーウツなんですよ…」
どうやら川口先生は良く思っていないらしい
倉庫にたどり着き、荷物を積み重ねていく。
「ふう、あと一回位で終わりますね、行きましょう」
「…転送魔法を完全に使えるようにしとくべきだったな」
蒼龍を羨みつつ、今来た道を戻って行った。

いつもより豪華なメニューが乗ったトレイを受け取り、聖はベランダに近い席に座った。
大きく背伸びをして頭や肩を回して疲労を和らげた
「アンタそんなに体動かすようなことしてたの？」
その正面の鈴が座った。
「こちとら肉体労働してんだよ。空中遊泳はさぞ気持ちが良かったろうな。」
「禁止されているアンタと違ってアタシは教える立場だったんだからこれくらいいいじゃない。先生に奢ってもらってるんだからお互い様でしょ」
鈴はスプーンでカレーを一口。聖もとんかつに箸をつけた。
食べながら鈴は電子キーボードを使って何かをしていた。
「昼飯くらいゆっくり食べろよ」
「いいじゃん、情報収集よジョーホーシューシュー」

「…対戦相手の確認か」
「そっちは後で、学級掲示板に掲載されるよ。ニュースみてんの」
「…へぇ。で、どんなニュースなんだ？」
「なによ、その驚いた顔は…。私だってニュースくらい見るわよ！
！勝手に世間知らずみたいなイメージ持つのやめなさいよ！」
「で、どんなニュース？」
「誤解が解けない！？」
「わーったよ、鈴は真面目でガリ勉な少女なんだよな、よしＯＫ！」
「……――はぁ。…二日前にオランダとベルギーで無所属ＩＳによるテロがあったのよ。スグにドイツとフランスが対応したけど…今は、無所属ＩＳがどこの国のＩＳか、国連でモメてるらしいわ」
「そんなん、操縦者に聞けば一発で済む話だろ」
「逃げられたみたいね、脱出用のプログラムが積まれていたらしい」
キーを叩くと、二人の間に画面が出ていくつかのＩＳから何かが射出される映像が流れた。
「ご丁寧にジャミングまでかけていたなんてね。でもそれより問題なのは‘安全装置’が外れていたことよ。」
「どうしてだ？」
「普通ＩＳには、安全装置という名におリミッターが付いている、これは万が一相手の操縦者に直接ダメージを与えてしまわないようにするための足枷のような働きをするモノなの、それが外れているということは相手を殺す事も可能ってわけ。だから各ＩＳ保有国は安全装置を解除しないって協定をむすんだのよ。お互い戦争にＩＳは使わないって意思表示のためにね。」
「だから、掟破りのしらねーヤツが出てきたから、混乱してるのか。」
「無所属で必ずしもＩＳ保有国と公表してない国もあるからね。」
鈴は残りのカレーを口にいれた
「ま、今はそんなの考えているヒマ無いしね」
「初戦落ちってオチは無しな」

「そんなヘマするわけな――――」
【えー、テス、テス、マイクのてすと中…ＯＫ？えー改めてはじめまして生徒会長の更識楯無です一年の天神聖君は至急生徒会室に来てくださいねー，至急，ですよー？】
マイク越しの声が途切れた。
「…早く行ったら？あの人何するかわからないわよ？」
「そだな。鈴、生姜焼き食べるか？箸付けてねーぞ？」
「お、ありがと」

少し遠回りをしたものの、聖は生徒会室に着いた。
「一年、天神聖です。失礼します」
「失礼するなら入らないでいいよー」
「じゃ、俺はそういうことで」
と言って開けた扉を閉じようとする
「冗談だって、聖クンは素直すぎるなー、キスしてもって返りたいよ」
「遠慮しときます」
いつものことなのか、お互いに照れる素振りを見せなかった。
今度は生徒会室に入ってから、聖は扉を閉めた。
「聖クンは、ＩＳのテロの話はもう知ってるよね？」
「ええ、ついさっき鈴から」
「テロ対策でね、明日のクラスリーグマッチの警備強化することが決まったんだ、教員だけでは不安だから聖クンには警備の手伝いをしてもらうよ。」
「わかりました…って言わなくても確定なんでしょ？」
「そうよ？良く分かったわね」
なぜこんな性格の人が生徒支持率を独占しているのだろうか？
…あまりにもカリスマ性が有りすぎる。
「この前の続きだけどさ、一応鈴ちゃんを要注意人物として注意してね。あの伝言で一番確立高いの鈴ちゃんなんだし」

「……」
苦い顔をしたまま、聖は何も返さなかった。友達を監視することに後ろめたさを感じているのだろう。ましてや幼馴染だ。
「言っておくけど、キミは悪いことをやっているんじゃないよ。ちゃんと理解してる？あなたは，朱雀，なんだよ？左右区別できない赤ちゃんじゃないんだよ。」
「そうですね…失礼しました」
表情を崩さぬまま、取っ手に手を掛けた。
「―――先輩」
扉を開く
「…何かな？悩める後輩クン」
「その言い方やめてください。ただ…」
廊下にでて振り返らずに
「先輩のさっきの言葉、左右区別できる赤ちゃんに失礼ですよ」
「それはそれは、すごい赤ちゃんがいるのね、私こそ失礼してるから生徒会長室に入っちゃいけないのかもね」
楯無先輩が皮肉じみた顔をした
「…それでは」
扉が閉まった。
「…少しきつく当りすぎたわね。」
言葉で言い表せられない顔をしながら楯無はつぶやいた。

教室に戻ると、黒板の向かい側の掲示板に小さな人だかりができていた。
遠目からだと、トーナメント表が貼られている（実際には学園のサイトにUPされている）のが見えた。
小さな人だかりの中から目的にお人物を見つけるのは簡単だった。
「対戦相手は誰になったんだ？」
「一組のセシリア・オルコットって言うイギリスの代表候補生よ」
「どんな奴だ？」

「会ったことないからよくわかんないけど、第三世代のブルーティアーズを使う遠距離型よ」
「ふーん、遠距離ってことはロングレンジラウンダーか、ショートレンジのお前からすると苦手なヤツか？」
「そうねぇ、ところで会長に呼ばれてたけど、なんの話だったの？」
体が金縛りに遭ったような感覚に陥った。それに気付かれないように事実だけを伝えた――もちろん監視に関することはのぞいて。
「明日のクラスリーグマッチで警備をさせられることになったんだと、先生が一人たりないからその分埋めないといけないから」
「アンタそんなに強かったっけ？ＩＳも禁止されてるのに？」
「俺は‘魔法’が使えるからな、ＩＳより素早く対応できる。」
「‘魔法’を使える人はＩＳを使える人より少ないんだよね？」
「ああ、格段と少ないな。」
「だから、あの時帝学院に転校したんだよね。――ね、私専用の家とか建てて☆」
「なに言ってんだよ、そんなメルヘン能力は持ってねーよ」
「え？‘魔法’ってそんなんじゃ…」
「偏見だ！！」
意地悪そうに笑った。聖にとって最も注意すべき人間が自分だとは思わぬまま。
一度は決心がついたはずの心が少しだけ揺らいでいく。その揺らぎが大きくなる前に歯を食いしばって感情の波を抑える。
「ちょ、冗談ってば…」
「…ん？そんなに険しい顔してたか？」
「歯ぎしりまで聞こえたわよ」
「してねーよ、試合中はワンセグ越しに呪術を掛けてやるから覚えとけよ？」
「人が人だから説得力半端無い！？」
「恐縮です」
「褒めてないわよ！」

そんなやり取りがチャイムが鳴るまで続いた。
中途半端な決心を、見ないふりをしながら。

――――寝覚めの悪い朝だった。
いつもより早く起きた聖はまず洗面所に向かった。虚ろな意識を、冷水で覚まさせる。
――――このまま、中途半端な決意も消えてしまえばよかったのに。
手早く支度を済ませて、ケータイの電源を点けた。
待受にはメール着信と表示されてる。
『楯無…先輩？』
それは、昨日の夜、聖が寝た後に送られてきていた。

クラスリーグマッチは、学年ごとに一つのアリーナが割り振られている。
そのうち聖は一年生が使う第三アリーナを担当することになった。
「聖クン、メールは見たかしら？」
正面入口には楯無先輩がいた。
「…ええ、まあ」
「それじゃあ、ココは任したよ、私は三年の第一アリーナ担当だから」
どうやら、生徒会長も警備に回されたようだ。担当である第一アリーナへと向かって行った。
「…ったく、あの人は何であのタイミングでこんなこと言えるんだよ。」
後ろで、織斑先生の声が高らかに空気を震わす。
【ではこれより、クラスリーグマッチを…開催する！！】

疑惑の舞台の幕が上がった。

## 第五話　赤く、朱く（後書き）

はい、なんとＰＶ一万突破！ということで、
皆さん、ありがとうございます。

さてさて、今回更新が遅れてすいません。
次の話は、戦闘回の予定です、次も楽しみにしていて下さいね。

## 第六話　疑惑、その末（前書き）

今回も戦闘回、そろそろ日常回を設けないと、戦闘小説になってしまう。
で、これから、前書きと後書きを書いてるひとが交換しました。

## 第六話　疑惑、その末

高らかな声は、実によく耳に響いた。
波打つ空気は聖の鼓膜を震わせる。
波打つ空気はこの上なく澄んでいて、後ろから黄色い歓声が聞こえてきた。
聖の心境はその流れに置いて行かれていた。
と言うよりも、流れを感じようとすらしていなかった。
一点の‘疑惑’を‘信念’とすべく。
ワンセグ機能を用いて学園内のみ使われているチャンネルを経由して試合を眺める。
滞る事なく、試合は進む。
「キミ、少しは休んだほうがいいぞ？」
アリーナの外を巡回する監視員に話かけられた。
「あ…大丈夫です。一応、僕も警備なんで、、見とかないと」
「だが、キミは緊急時の話だ。なにも見回りまでしなくていいんだ。生徒会長の依頼なんだろ？もしもに尽力できないでどうする。」
どうやら、蒼龍からの伝言について知る数少ない一人のようだ。
「は、はぁ…」
「俺たちは無能じゃないんだ。キミはキミの役目をこなさないといけない。特に最大限にね。一人一人の負担を軽くするから俺たちは大人数行動をするんだ。そうだろう？」
その後、彼は通信機を耳にあてがい、専門用語らしき言葉を発した。
「ともあれ、もしもの時は、俺らを守ってくれよ」
監視員は去っていく。そのとき聖の目には【ｌｅａｄｅｒ】と記された腕章が映った。
――――あの人は、周りを信じているから、慕われているのか…
状況を確認しようとして、そのままにして暗くなったケータイの画面を明るくさせた。

――――――――TLLLLL、TLLLLL…
「どうしたんすか？楯無先輩」
『鈴ちゃんの試合、もう始まってるよ？』
「判ってますって」
『さっきまで監視員のリーダーさんと話していたのに？』
――――だめだ、この人に嘘ついちゃダメだ。
『隠密、ナメちゃだめよ～？』
「…肝に銘じときます」
『あ、軍神は出さないでね、パニック増しちゃうから』
「大丈夫ですよ、小軍神系の召喚獣を使います。」
『それで勝てるならいいけどね～』
「先輩こそ魔法使いを舐めてるじゃないっすか」
『いや、その力は軍神に依存した力だと思ってるからね』
「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえませんよー」
『はいはい、真に受けない真に受けない、全く弄くりやすい反応ばっかするんだからー』
「あーもー、試合見せてくださいよ。頼んだの先輩なんですから、その先輩が邪魔するなんて、どんだけ意地悪いんですか」
『――会長～早く来て下さい～――』
別の声が遠くから聞こえた。
『今行くよー、じゃね、私は二、三年の所に――――』

ガラスが割れるような劈く音がした。
歓声から、悲鳴、悲鳴、悲鳴――――
「…畜生ッ！！」
前もって確認していた関係者用の出入り口のノブに手をかけた。
「…ッ！！開かない！？」
何度も何度もノブを捻ったり、押したり引いたりを繰り返すが乾いた金属音が鳴るだけだった。
扉の奥では、爆発音や何かが崩れていく音がした。

「クソッ！！なんでだよ！！！」
――――――――鈴！！

その数分前。鈴は既に出撃ハンガーに立っていた。
右手を握ったり開いたり、最後の稼働確認を行う。発信機から出撃のナビが入った。それに従って鈴はセンターサークルへと向かう。
「あなたが鳳鈴音さんですね。わたくしはセシリア・オルコットと申しますわ。同じ代表候補生としてよろしくお願いしますわ」
金色のウェーブがかかった長髪を揺らしてセシリアは挨拶をした。
「よろしく、名前はよく聞くのに初対面が戦う時とはねぇ…」
「まったくですわ、今度ゆっくり話しませんこと？」
「んー、やめとく。一夏と約束あるから」
「…ッ！あなた…一夏さんとお知り合いなのですね」
「そうよ。私は一夏の――――幼馴染よ」
開戦と同時に甲龍の衝撃砲から空気の弾が放たれた。
‘ブルーティアーズ’の右翼を掠められながらセシリアは距離をとる。
「不意打ちなんて、節操ないですわね！！」
特殊レーザーライフル‘スターライトＭｋ－？’のスコープを目にあてがう、ライフルではあり得ない速さで撃ち続ける。鈴にレーザーが届く前に次のレーザーを避ける先を読んで撃っている。
鈴は右下に迂回しながら、時には青龍刀で弾いて応戦する。そこから打ち上げる形で再び衝撃砲を先ほどよりも威力を上げて放つ。
だが、今度は軽々と避けられてしまった。
「どうして当たんないのよ！？弾道も弾頭も見えないはずなのに！！」
「反動距離、銃口の向き、遠距離武器の特徴は私のほうが長けていましてよ！」

距離を保ちながら、立て続けにレーザーが飛ぶ、全ては避けきれず鈴のシールドエネルギーが徐々に削られていく。
――――あのまま撃ち続けていたらどこかでリロードをするはず。
それまで――――。
スターライトＭｋ－？を見ると、セシリア本体と直結されているケーブル等は見当たらない。
弾数にも限りがある。それもレーザーなら消費も早い。
もし、本体とリンクしているならば弾倉用エネルギーが尽き、自動で補給されるまで長時間撃ち続けられる。
つまり、いつ弾が切れたのか判りづらい。もし判ったとしても、自動補給は３秒とかからない。
だが、そうでなければある程度撃ちきる毎に手動で弾倉を取り換えなければならない。
鈴は、その時を狙っていた。
――――リンクさせないのは容量オーバーを防ぐ為。なんらかの理由で弾倉用エネルギーを入れることが出来なかったからのはず。
セシリアにとってやりづらい真下で粘る。
弾幕が途切れた。
『今だ！！』
衝撃砲を放ちながら、急接近。
「！！！」
難なく衝撃砲を躱したもののその間の鈴の接近に不意を突かれ、リロードを急いだ。
「間に合うワケないでしょ！！」
リーチが長くなった‘アンビデストラクションフォーム’、二つの青龍刀を繋げた状態で斬りかかった。
だけど、セシリアは笑っていた。高貴な表情を崩していない。
リロードは完了していないのに。
ブルーティアーズの両翼から、ビットを射出する。
「ブルーティアーズ…。私の機体の名前の由来になったものですわ

！！」
続けて二機のミサイルビットを射出する。六方からの同時攻撃。
青龍刀を分離させても捌ききれるようなものではなかった。
当たれば確実に終わる。
鈴は青龍刀を分離させ、衝撃砲を撃つ、龍砲、に手をかけた。
「いっけぇぇぇえ！！」
最高出力で発射。反動で鈴は急降下する。
「キャア！！」
何故か動くこともできず衝撃砲は直撃した。
ワンテンポ遅れてレーザーとミサイルは空を切った。
地上すれすれでブレーキをかけ、鈴は落ちていた青龍刀を拾う。
ダメージを負ったセシリアが、なんとかリロードを終えた。
「腑に落ちませんわ…ダメージは大きかったですが、あんなに反動が大きいワケがありませんもの」
「ブースターを全停止させていたのよ。撃つ時にね」
ビットが装填しなおされた。
「そうでしたの…でも、これで終わりですわね」
「アンタがね、――――くあッ！！！」
構えなおそうとして、背後からの衝撃で地面に叩きつけられた。
アリーナのシールドごと貫通してきた攻撃だった。
「鈴さん！？」
近づこうとして、セシリアにも謎の攻撃が襲う。
「クッ！わたくしのより出力が上…」
上空へと構えて、銃口をゆっくり動かす。
――――【熱源発見】
「そこですわ！！」
マーカーへと的確に撃つ。
狙撃者は既に背後を取っていた。
鈍色の体躯に似合わぬ巨大な鉄腕が青の機体を突き飛ばす。

悲鳴すら出せず、壁にぶつかる。
「――ッ！、緊急事態（エマージェンシー）！！緊急事態（エマージェンシー）！！！一般生徒並びに来賓は但ちに避難を！！」
観客席の隔壁が閉じられた。
それでも、悲鳴は奥から届いている。
「あれは…ＩＳ…？」
鈍色のＩＳらしき機体の搭乗者はゆっくりと辺りを見回して、気を失ったセシリアと地面に突っ伏して自分を凝視する鈴を観察している。
「見たこともない形に聞いたこともないスペックに無所属…しかも、‘安全装置’外しているわね…」
本来、どんな攻撃をどんな状態で受けても操縦者に直接負担（ダメージ）は蓄積させないように安全装置が組み込まれている。
ガタがきている機体を起こして立ち上がる。
「アンタ…アンタ一体誰なのよ！！」
衝撃砲を放つ。
鈍色の機体は首を傾げるような動作をして自らの腕でそれをかき消した。
「ホン…トに…何なのよ…」
今度は掻き消した腕をじっくりと観察し始めた。
傷などは付いていない。
観察を終え、鈍色は両肩に搭載したビーム兵器を構える。
恐らく、シールドを破壊する程の威力を持っているモノを。
スラスターが言う事を聞かない。早く動かないと、私、やられる。
死ぬかどうかは分からないけど、逃げなくちゃ。
動いて、お願い甲龍…動いて！！
その時には鈍色はトドメを刺そうとしていた。
発射されたビームは一直線にすすむ。猶予は無いと言っているように。
誰による、意志が込められた一撃だったりか。それは誰にも知られ

ること無く。降ってきた炎の弾に遮られる。
「やりましたよ、兄貴！！」
「わーってる、やいやい騒ぐな！」
火を揺らめかせる鳳（おおとり）の背にのった魔法使いが降り立った。
隣に同じくらいの背丈の鳳がはねを休める。続けざまに鳳が口を開く。
「兄貴冷たいっスよ～、も少し褒めてくれたって…」
「あのヤロー潰すのが先だ」
「はいっス…」
鳳の頭（こうべ）が垂れた。
――――聖？
ダメ、逃げて…どうしてこんなところに…殺されちゃう。生身のアンタなんかすぐに殺されるわよ。だから…早く逃げて…私が…食い止める…か…ら――――。
鈴の意識はここで切れる。
「‘九重（ココノエ）’。この子と向こうで倒れている子、二人を安全なところに運んどいてくれ」
「判りましたっス。すぐに加勢するっス」
九重と呼ばれた鳳は、羽で器用に鈴を背中に乗せた。
「いや…いい。ちゃんと意識が戻るまで見とけ。他の人にお前見られると混乱が激しくなりかねない。」
「軍神でも同じじゃないッスか？」
「小回り利くのはお前だけだろ？それにサイズも違う。おら、早く行った行った。」
九重が去るのを見送り、振り返って鈍色に問う。
「…誰の差し金だ？」
鈍色は答えない。
「テメエは誰だ？」
鈍色は首を傾げた。
「テメエは人か？」

鈍色は動かない。
「鈴をああしたのはお前かッ！！」
手の先が光ると同時に火が飛び出した。
火はどんどんと‘鉄’であるはずの鈍色をつつんで燃え広がっていった。
その中から鉄の拳が出てきた。聖は把握していたかのような感じで受け流して五、六歩離れた。
もう一度炎を飛ばして威嚇をする。鈍色はぐりんと上半身だけを右に捻り炎ごとビームで貫く。
空に手をかざし、六芒星が描かれた、それにかざした手を横に払うと、聖の目の前に半透明の分厚い壁が出てきた。
だが、魔法力を解放していない状態では3秒と持たない、貫かれる前にその場から左に飛び退く。
――――やっぱ、未解放状態での物質硬化は‘玄武’のほうが上だな。
同じ四神（ルシ）の仲間を思い出し、苦笑した。
両手を前に突き出し、地面に魔法陣がでてくる、そこから極薄の5cm四方の鉄板がでてきた、その鉄板に触れると赤く灯り、陽炎を発する。
陽炎が形を御していき、回転をかけながら鈍色へと投げつける。速度をどんどん上げていく鉄板は鈍色が防御で顔の前で交差させていた腕を切り刻んでいく。
いや、鋭利な刃物で刻むというより、高温で溶かすように見える。
鉄板は鈍色の様々な部位に突き刺さり、暴発し破裂していく。
鈍色は脚部を使い加速して、右腕を後ろにのけ反らせながら聖に迫った。今度は、先ほど出した鉄板に指をあてる、
すると、鉄板は膨らみ、分裂して複数の炎球が出来る。高速回転しつつ空中を浮遊しながら接近するようにしかけた。
だが、さっきの炎刃より速度で劣る炎球が鈍色を捉えることはできない。

聖は、口角を釣り上げた、鈍色の後ろに、先程の鉄板が呼び出されていた、そして、炎球に刺さり爆発。鈍色が朱く染まった。
一度膝をついたものの、鈍色は腕を振りかぶり、レーザーを放って炎を吹き飛ばした。
鈍色の腕は、切れた口から溶けていっており、右腕はすでにちぎれて落ちていた。
「まだ動くかよ…」
「終わったッスよ。楯無サンに預けてきたッス」
九重が戻ってきた。
「九重、前言撤回だ。手伝え」
「変化ッスか？」
「そうだ」
鳳の姿は、錆びた歪な球になった。鉄板と同じように触れる。
「三ツ目、火種散リ」
散り散りになった錆び一つ一つが炎を帯びた雀となり、鈍色の体内に入り込む。
「――――崩せ、九重」
雀の浸食。鈍色は内側から腐敗していく。

遠いどこかで、誰かが言った。
「回収、言ってきてね」
指示された巨漢は、何も言わずに頷いた。

## 第六話　疑惑、その末（後書き）

最近暑さで執筆ペースが乱れに乱れまくっているＡｂ．５９です。
沖縄でも
最高気温１８～１９℃です。
前書きじゃあ、ネタばれできないんで、後書きに回してもらいました。
聖の使い魔を出してみました。なにせ、軍神だけじゃ戦いづらいので、
ＩＳも駄目、軍神も駄目…ならどうしろと！？
九重に至ってはまた別の話で細かく。ということで。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5474y/

～IS～FINALFANTASY

2011年12月11日22時56分発行